

2020年5月31日(日) 瑞穂キリスト教会 ペンテコステ礼拝

メッセージ題 「おんなじいのちだから」

聖書：使徒言行録第10章1～48節

牧師：秋山 義也



本日はペンテコステ礼拝です。使徒たちに「聖霊」が臨んだ、キリスト教三大祝祭の一つで、聖霊降臨祭と呼ばれます。キリストの復活から丁度50日目のことでした。一同が集まっている時に、聖霊が臨み、彼らは勇気づけられ、人々の前に出ることができるようになり、キリストを証しする者とされたのです。この日は「教会の誕生日」とも呼ばれます。この日を境に、使徒たちは伝えるだけでなく、イエスを主と告白する人々と積極的に交流し、祈りを合わせ、礼拝を共にし、教会を建てていったのです。それは、あの聖霊が臨んだ世界中の言葉を語る出来事に象徴しているように、世界の人たちと出会い、世界中にキリストが広まっていく。世界中で教会が建てられていく、その始まりの日であったのです。その日を記念することで、今、日本にいる私たちもこの日、ペンテコステの歴史の延長線上に生かされており、共に礼拝する恵みにあずかっています。コロナ禍のことで、より見えてきたことの一つに、本日の週報巻頭言にも書きましたが、私たちは独りではない、ということがあります。世界中の教会における様々な選び取り、コロナ禍に対する信仰的応答、聖書の解き明かし、社会、地域との対話など、教えていただいています。巻頭言には、主にバプテストの協力関係からいただいている視点を書きましたが、カトリックやプロテスタント問わずに、近くの教会、遠くの教会の様々な状況を緒教会のホームページや牧師との電話連絡から知ることができるのです。そして、今日様々な教会でもこの日、ペンテコステを祝っています。独りではない！と心強められ、世界に出かけ、世界と出会い、世界に語る者とされた出来事を今私たちも恵みとして受け取りたいのです。

さて、その聖霊降臨祭の日に私たちに与えられたのは、聖書教育誌（バプテスト連盟が発行する教会学校テキスト）にある使徒言行録第10章の言葉です。本来は数節分でしたが、この個所を読むにつれ、10章まるまる一緒に読みたいとの思いに至りました。

バプテスト連盟の諸教会で起きていることは、私たちの教会でも起きていることであると言えるでしょう。それは、様々な国の人たちとの出会いが与えられているということです。カンボジア、インドネシア、ルワンダなどの宣教師が派遣されている国との出会いがあります。中部連合においても、1月の賛美の研修会で、四日市教会に現在来られている外国出身の方々が、折角の他教会の変わりだからと、来会されていました。本日、連合少年少女会のオンラインお茶会が開催される予定ですが、何人かの少年少女たちと連絡を取る中で、外国にルーツをもつ人たちがいることを教えられます。そして瑞穂教会においてもいろんな国、民族、文化との出会い、礼拝を共にする恵みが豊かに与えられてきています。コロナ禍において、世界中で感染が爆発的に拡大したというのは、世界中の人の行き来があり、出会いに溢れている私たちの生きる世界的、時代的象徴でもあります。私たちはこれまでその出会いを喜んできました。

外国から見た日本、名古屋、そして瑞穂教会は一体どう映っているのだろうか？という、視点を教えてもらいます。

その出会いがコロナ禍のことで、外国人と付き合うからこうなったんだと偏った結論に至るのであれば、私たちには大きな過ち、罪があることを正直に認めなくてははいけません。おなじいのちである。おんなじ人である。その神さまからの大前提に立った上で互いの文化や背景を理解し合うことに努めていく。そうでなければ、外国出身の方々はまだ私たちの利益のための存在としてしか見ることができない罪、いのちの優劣をつけてしまう、過去の歴史にある過ちを犯し続けるものとなるでしょう。

聖書教育誌の今回のところには、ラグビーW杯のことに触れているところがありました。あの時のスローガンであり、流行語にもなりました「ONE TEAM」という言葉、皆さんも覚えていらっしゃると思います。様々なルーツをもつ人々、その多様性が、見事に一致して、一つのチーム「日本代表」を体現する。一つの目標に向かって、違うルーツをもつ人が共に激しくコンタクトする。スクラムを組む。トライを目指す。ここに大きな感動が生れたのですが、聖書教育の中では、その多様性や多国籍における「ONE TEAM」は、私たちの国への貢献やメリットになる場合に限定されていないだろうか？その外国の方々はいいい人で、ではたとえば難民となって逃れてきた人、「助けて欲しい」と言う人に対して、私たちはあなたとは「ONE TEAMです」と、目を見ていえるのか、という問いの視点が記されてありました。私もまったく同様な視点を、高校でラグビーをしていた時、近隣の強豪校が留学生を抱えている時から抱いていました。「助っ人」でなくなった時、彼らは果たして日本にいたいと思うのだろうか、ということでした。

今日、私たちはそのような問いの視点に対して、神さまが下さる新しい希望、ビジョンがあることを知るのです。異邦人であるコルネリウスと使徒ペトロの出会いの出来事です。

まず、異邦人のコルネリウスに天使が現れました。そして、ペトロを招くように伝えるのです。彼は信仰の篤い人であり、祈りと施しを欠かさず、家族全体でその奉仕にあずかっていました。

そして、続いて使徒ペトロにも、神は幻を通して、「あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が詰まっている袋」を示し、「身を起こして、食べるよう」(13節)と伝えるのです。ペトロは、律法の中に汚れたもの、食べてはいけないものがあることを知り、それを忠実に守っていました。

こうしたルーツの違いのあった両者は、互いに交わることはありませんでした。ユダヤ教の律法には、異邦人と食事をすることに対するの禁止があったのです。特に、これが汚れているという食べ物は、異邦人が好んで食べていたり、または偶像に献げられていたものだったからです。汚れたものを食べないということはつまり、異邦人はそれを食べて汚れていて、交わりをもつことはできなかったのです。

しかし、彼らは出会いました。それぞれの時に、それぞれの場所で、主の言葉、主の思いがのぞんだのです。彼らは互いにあったことを分かち合いました。つまり食事の交わりに招かれたのです。コルネリウスがペトロを迎え、招いたように見えるこの個所は、実は神によって互いが互いに招かれた食卓であったのです。

そしてその食事の交わりは、コルネリウスが、ペトロに対してひれ伏す挨拶から始まります。コルネリウスもまた、異邦人と交わらないペトロのことを気にかけていたのでしょうか。そして神に対する恐れからそれをなしたのです。しかし、ペトロは、ここで彼に対して、「お立ち下さい。わたしもただの人間です。」と答えました。(26節)わたしも、あなたもおんなじ人間。おんなじのちなんだ、と。神から招かれ、神に呼び集められた食卓では、これまで避け合っていた者たちが、へりくだる者とされ、神によって互いのいのちを喜びあえるものとされていくのです。

コルネリウスはこの次第を話しました。

ペトロは、その話に耳を傾け、神を告白しました。

「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。」(34-35節)

このように神を言い表してから、イエスを主と告白し、キリストを証しました。

「神は人を分け隔てなさない」この言葉には、つまり、神ではない私たち人が、人を分け隔てしてしまう者であること、その罪があることが含まれています。この個所は「神は偏らない方」とも訳せるところです。私たちは人をついつい偏って見てしまいます。あの人はこういうところがある。あの国の人にはこういうところがある。その言葉が次第に、人と人との壁をつくり、いのちの偏りをつくり、それを良しとしてしまうのです。差別のことが起きても、それは仕方ないね、と見過ごしてしまうことがあるのです。ペトロもまた、汚れたものを食べたことがない、という言葉を出しました。そのことから見えるのは、結果として、神の律法、神への信仰を忠実に果たしているという言葉に尽き添うようにして、異邦人、外国人を偏り見てしまうという告白でもあったのです。

人は他者を偏り見てしまう者です。しかし、神は偏らない、いのちを差別しない。こっちが尊い、こっちが乏しい、と言われない。みんなおなんじいのちで、大切なのだとその思いに生き、両者を出会わせ、いのちの交わりを下さる方なのです。それはまた、イエス・キリストに返っていく生き方でもあります。主イエスは、人を分け隔てなさいません。自分にとってのいいとか、悪いで判断しません。罪人と呼ばれえる人々と一緒に食事をしました。かわいそうだからではありません。おなんじいのちで、友となるためでした。ここに、キリストの愛があります。そしてその愛を受け入れる時に、ペトロがそうであったように、私たちも、他者のいのちに開かれていくのです。偏りみることからの解放の出来事が起きるのです。差別をしてしまう。その視点をもって自分を認めながら、なお、神に祈ることができる。出会ったいのちと共に神を賛美する者とされていくのです。

キリスト教会にとっての「ONE TEAM」の理解は、自分たちにとってメリットになるかどうか、ではなく、共に神に助けてと叫ぶるかどうかがかぎです。今日、コルネリウスとペトロにそれぞれに神さまが臨んだのは、祈りの時であったことが記されてあります。それぞれの場所、時間でしたが、それぞれに神に祈っていたことは共通の出来事でした。神を畏れていた。それは正に自分の心の内にある思いを神にさらけだし、助けて下さいと祈るその姿でした。他者への施しの思い、隣人を慈しむ心を主は知って、語りかけてくださるのです。

どんな国の人でも、どんな宗教の背景がある人でも、共に助けてと私たちが神をより頼む時に、神はその祈り願いを聴いて下さいます。コルネリウスに語った天使の言葉「あなたと祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。」(4節)なんと慰めと励ましをいただく言葉でしょうか。

今、私たちも共に祈りを献げたいのです。自分の助けて欲しいことがらを心の内にある思いを、神に語るのです。隣人のことを、名前をあげて祈るのです。その時、主は私たちに新しい隣人と生きる視点、知恵、助けを備えてくださいます。コルネリウスとペトロの ONE TEAM のように、「ただの人間です」と語り合いながらも、食事を楽しむ集いを備えてくださるのです。私たち瑞穂教会もいつも、そのような食事の交わり、楽しさを覚えて、他者との出合いを待ち望みたい。心からの感謝を主にささげて、隣人を迎えたいのです。その日を今日、聖霊をいただき備えたいのです。

このようなコルネリウスとペトロの出会いの中で、聖霊が一同に臨みました。(44節) 聖霊がくだる、ペンテコステの出来事は、あの日一回のことではなく、主イエスによるいのちの出会いの喜びが溢れ、主イエスのイキイキとした十字架と復活の出来事が語られる時に、いつでもわたしたちの上に注がれるのです。そして、聖霊の賜物が異邦人に、外国人に、今、ここにいる私たちに注がれる時に、おなじいのちだねと喜び合える時に、主は聖霊と水によるバプテスマを備えてくださるのです。ユダヤ教の信仰の証しは、割礼でした。これは男性の性器の包皮を切り取るものでした。女性は受けることができませんでした。異邦人にもまた、様々な理由からハードルがありました。しかし、水で受ける事のできるバプテスマは、全ての人に開かれています。これもまた、いのちを偏りみる視点から解放された救いの喜びの出来事なのです。コルネリウスとペトロたちのイキイキとした霊の交わりの様子が伝わってきます。

次週、私たちは会堂礼拝を再開します。これまで一緒に通った出来事が、どのようなものであったか、また互いに主に祈り求めていきたい。執事会では、礼拝再開に際して、祈って備えようと声を発して下さった方がいます。共に集うこと、讃美すること、祈ること、感染予防の観点から、いろんな限定があります。すぐにすべてを元どおりにできない、痛みがあります。しかし、共にそれぞれのところで、それぞれの時間、主に祈り、この一週を過ごしていただきたいのです。

会堂礼拝再開後も、大事をとって欠席される方がいるでしょう。その選を尊重しながらも、共にまた出合わせ、互いのいのちを気遣う、「あなたもわたしもおなじいのちで、大切」と声を掛け合える、その聖霊のわざに大いに期待していきたいのです。世界の礼拝、世界の教会、世界にあるおなじいのちのことを覚えながら、新しい一週を過ごしていきましょう。

